

不知火グループという名前は面妖である。何をする集団かすぐにはわからない。それで不知火研究グループとしようかという話も時々出るのだが、これでは「不知火」を研究するグループになってしまって、ますます具合がわるい。いっそ火をとってしまおうか。裁判ではよく「そのことについては不知、その余は争う」などという。そういうニュアンスで不知グループとする、これは意外と当たらずとも遠からず、現に「しらぬいぐるうぶ」は通称「しらないぐるうぶ」という。しかし、やっぱりいくらなんでも森羅万象不知では気安すぎる。とって「不知火海に発生した水俣病につき学び研究するグループ」ではちょっと実態と離れる。学んだり研究したりというと、たいそう真面目なグループのように振る舞わなければならないが、そんなことはない。ルーズなグループである。

しかしルーズとだらしなきとは、またおのずから違うのであって、勉強しようと思うのだがどうも怠けてしまう、遊んでしまうというのはだらしないのである。ルーズというのは、学んだり研究したりというとすぐに真面目だとか固いとか厳しいとかの連想が動く、そういう自分をまずときほぐそうという意味である。だから、そこに山があるからと同じ謂で、そこに「水俣病」という解決すべき巨大な人類的課題があることは否定しないが、その課題にしゃにむに立ち向かう、立ち向かうべきだとはしないのである。

これは言い換えると方法論の問題である。方法論といってもあまりピンと来ないかもしれないが、働かずに勉強する、学問や研究をして金をもらおうというのも方法論の問題である。学生とか学者、研究者が分化してくることを当然と認め、その枠内で考えをたてようとするなら、方法的に最もだいじな問題をすりぬけてしまうことになる。

事の順序としては、「水俣」に取り組むとこの方法的問題にすぐ
にぶつかるといってもよい。「水俣病」が発生し、隠蔽され、その
ゆえにかくも被害が拡大し、被害者が表現しがたい惨苦に一生閉じ
込められ、差別され続ける事態の根本には、その一つの根っこには
近代の不可避的に進行する分業社会がある。分業は人間を部分化し、
部品化するという痛切な体験と批判も実は西欧近代を構成するので
あるが、明治日本は急速な近代化をはかるために「和魂洋才」なる
スローガンをかかげ、「和魂」によって全体性、統一性が保たれる
かのようによそおい、「洋才」は部分性、技術性、専門性のように
みなしていわば哲学的、倫理的反省と切り離れた「洋才」を猛烈に
吸収し発達させたのである。昭和に入って後の狂信的天皇制イデオ
ロギーでさえ「洋才」を保持した。「はなみずき」をアメリカの花
だからといって公園から引っこ抜いたり、英語を禁止したからとい
って「洋才」を捨てたことにはならない。「洋才」なくしてどうし
て近代兵器を生産することができようか。

敗戦によって「和魂」は雲散霧消した。「洋才」にたいする歯止
めは形式的にもなくなった。天皇みづから「洋才」＝「技術」立国
を勅語をもって呼び掛けた。「エコノミックアニマル」「テクノア
ニマル」が主導する「技術管理社会」への路線が敷かれたのである。
とめどなく分業は進行する。それは日本だけの現象ではない。資本
主義社会、社会主義社会を問わずいわゆる先進国を目指す社会に通
有の現象である。しかしとりわけ日本において急激かつ激烈に進行
した。

その象徴が「水俣病」であり、その最大の被害者が水俣病患者で
ある。

問題は明らかである。分業ぶり（専門）を誇りにして、あるいは
分業ぶりに無自覚に「水俣」にかかわることはできない。そしてわ
たし達は好むと好まざるとにかかわらず分業を強いられている。だ

から逆に言えば「水俣」にかかわることによって、自らの分業ぶりを照らし出されるということにもなるのである。しんどくなくないきまっている。方法的にルーズになる必然性はほとんどあるというべきである。